植物と暮らす家

建築家と造園家の幸福な出会い

季節の移ろいを感じたり、刻々と変化する木漏れ日を楽しんだり…。庭のある暮らしは、様々な楽しみや喜びをもたらしてくれる。単に樹木を植えるのではなく、植物とともに暮らすための庭づくりを提案してくれる造園家と建築家が出会ったとき、そこには庭と家が見事に一体となった豊かな空間が生まれる。植物を慈しみ、寄り添って暮らすそれぞれの庭に秘められた物語を紹介しよう。

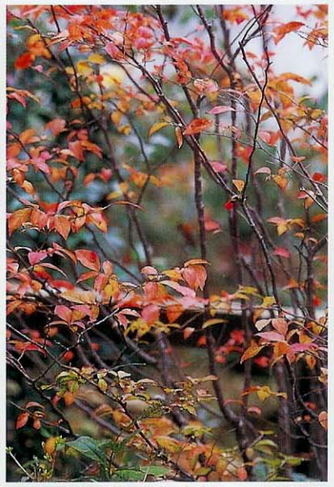
妻の佑子さんは職業訓練所で植木の勉強をしたほどの植物好き。「好きな花だけ植えて雑草を全部抜いてしまってはだめなんです。ある程度競争相手がいると負けまいとして、植物が元気になるんですよね」

植物と暮らす家

永田邸

東京・東久留米市◎家族構成／夫66歳 妻63歳 長女35歳◎床面積／85・40㎡

建築家 永田昌民 × 造園家 田瀬理夫



以前の家の庭で育てた植物を土ごと移植。旗竿地の長いアプローチを緑の小道に

建築家 永田昌民 / 造園家 田瀬理夫

LDKの床とテラスと庭は同一レベルで連続。左の写真はダイニング。引き戸と障子を引き込めば内と外が一体となり、視線は自然と庭に向かう。正面には前の家から移植した株立ちのヤマボウシ。庭に向かって全開口せず、居間のソファの正面に壁をつくってテレビを置いている。天井高は2.16mと低め。開きすぎず、広すぎず。身の丈に合った空間は居心地がいい

目の前にいつも緑がある。庭が近いから、自然のリズムを感じながら暮らせます

緑のアプローチを抜けて中に入ると玄関ホール。二女の作という美しい装飾ガラス入りの引き戸を開けてLDへ。1階はLDKのみ、2階に寝室、子供室、水回りがある。居間は漆喰壁に囲まれた落ち着いた空間だが、閉じすぎないように、階段室との間の壁の上部を抜いている。この家はOMソーラーを採用。「家の中の温度が均一で、空気がやわらかい。冬の朝も15℃くらいあって、パジャマでも大丈夫です」と永田さん

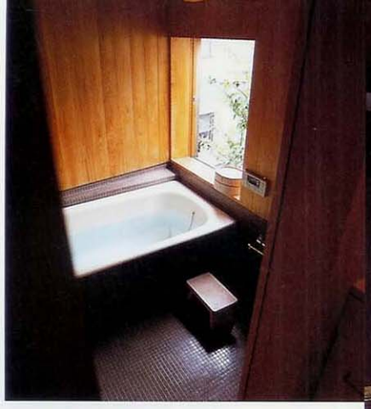
27年暮らした借家を出て旗竿地の新居に移転 庭の植物も一緒に引っ越しを

東京郊外、周囲に畑や果樹園が残る住宅地に、ひときわ緑の濃い一画がある。気づかずに通り過ぎてしまいそうな細い路地の両側をさまざまな植物が埋め尽くし、その間をレンガ敷きのアプローチが伸びている。木も草もそこに自然に生きているのだが、野放図に育ちすぎてはいない。この小さな雑木林を丹精している人がいるからだ。

路地の奥の住人は建築家・永田昌民さん。27年間、自らが友人のために設計した「東久留米の家」で借家暮らしを続けてきたが、5年前に引き払うことになり、徒歩で20分ほど離れたこの場所に移り住んだ。

普通の引っ越しなら、家財道具と人間が移動すればすむ。でも、永田家の場合は、そうはいかなかった。東久留米の家の約50㎡の庭には、27年の間に200種類もの植物が育っていた。ずっと一緒に暮らしてきた土と植物と小さな生き物たち。この豊かな庭の蓄積を置いてくるのはしのびない。庭ごと引っ越すことはできないものだろうか。

この前代未聞の試みは、造園家・田瀬理夫さんの力を借りて、みごとに成功。旗竿地特有の長いアプローチと、リビング・ダイニングに面したささやかな庭に、かつての庭の草花が表土ごと移植された。建坪13坪ほどの小さな家は、庭の緑に包まれてゆるやかに呼吸している。



寝室は低い書棚で書斎コーナーと分けられている。合板製の書棚は使い込まれていい味わい。書斎の窓からは隣家の庭を借景。浴室は玄関ポーチの真上にあり、アプローチが見下ろせる。窓を開ければクマシデに手が届く

Data

- 敷地面積：127.28㎡(38.57坪)
- 床面積：85.40㎡(25.88坪)
- 1階：41.82㎡(12.67坪)
- 2階：43.58㎡(13.21坪)
- 用途地域：第1種低層住居専用地域
- 建ぺい率：40%
- 容積率：80%
- 構造：木造軸組工法
- 工事費計：1,958,000円
- 3.3㎡単価：757,000円
- 竣工：2003年8月
- 設計：永田昌民(N設計室)
  〒171-0031
  東京都豊島区目白3-8-6
  ☎03・3951・6355
- 造園：プランタゴ
  〒113-0033
  東京都文京区本郷5-1-15
  ☎03・5840・6960
- 施工：相羽建設
  ☎042・395・4181

Materials

- 1階リビングダイニング
  床：ウールカーペット敷き
  壁：漆喰塗り
  天井：PB下地 AEP塗装
- 2階寝室・子供室
  床：北欧パイン
  壁：漆喰塗り
  天井：ラワンベニヤ目透かし張り、ワトコオイル塗り

Instruments

衛生機器：TOTO
厨房機器：オリジナル

造園工事費

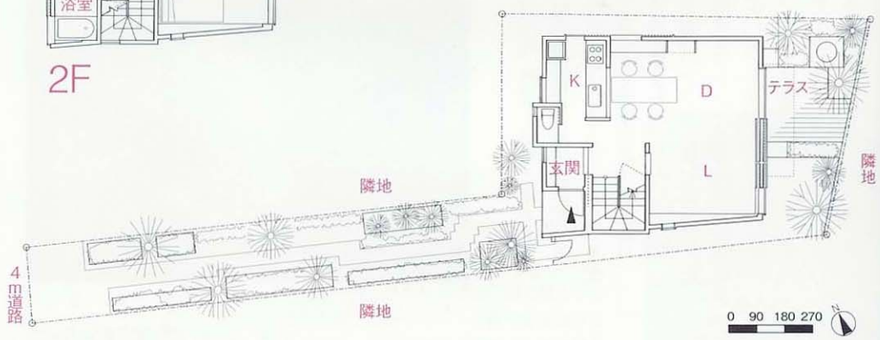
●5×緑(ゴバイミドリ)設置工事	9か所120万円
●舗装工事 30㎡	32万円
●植栽工事	48万円
高木9本、中木4本、低木60株、芝(アゼターフ10%)30㎡	
●雑工事、諸経費	30万円
工事費計	230万円

※設計監理費(工事費の15～25%)

撮影／大槻 茂　取材・文／阿部ルミ子

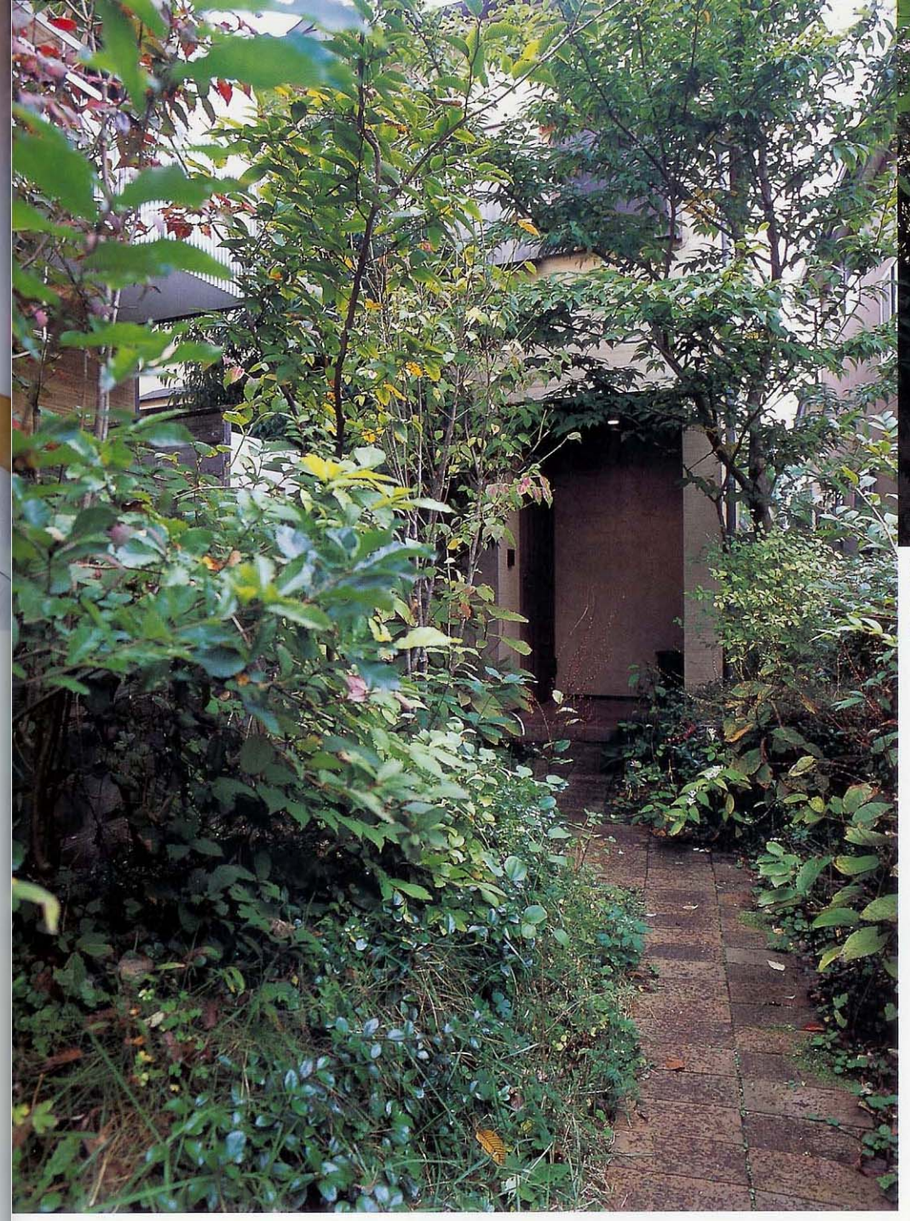
窓の外に植物が見えるだけで、癒される。小さな家でも、大らかに暮らせる

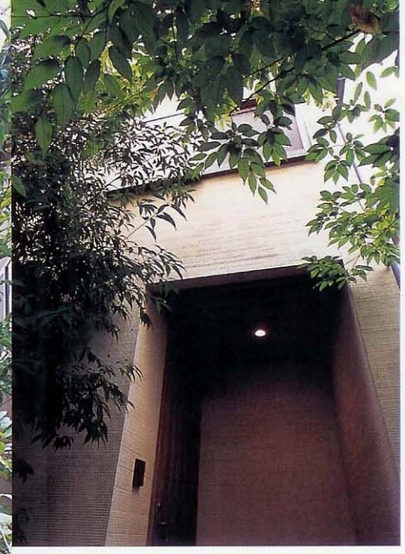
2F



1F

建築家 永田昌民 × 造園家 田瀬理夫





背の高い木、灌木、そして下草。様々な植物が織りなす重層的な緑の奥に家がたたずむ。玄関までの歩みが楽しい。「空がどう見えるか、葉が落ちたとき隣がどう見えるか、いろいろな場所に立ってみて植える場所を決めました」と田瀬さん

植物や虫たちと共存。庭があるから生活環境がこんなにも豊かに

アプローチにはカツラ、コナラ、イヌシデ、クマシデといった落葉樹が植えられ、その下を季節の草花が彩る。イチリンソウ、ニリンソウ、カタクリ、イカリソウ、ゲンノショウコ、ホトトギス、ツワブキ…。野山に自生している在来種ばかりだ。秋には赤と白の萩がトンネルをつくる。

「夏はたいへんですよ。葉が茂って、雨の日は玄関に着くまでにびしょ濡れになります」と永田さん。約15mのアプローチを歩くと、肌に触れる近さで季節を感じることができる。

玄関を入るとそこはLDKで、天井いっぱいまで開いた窓から視線がテラスへ、庭へと伸びていく。日透かしのある板塀に守られた庭の隅に、土管を埋め込んだ水鉢があり、周りを野草が覆っている。

「庭には植物だけでなく、昆虫もいるし、カナヘビなんかもチョロチョロ出てきます。鳥が水を飲みにくるから、木の実は取らないんです」

小さな家と、小さな里山のような庭は、生き物の気配に満ちたひとつの世界をつくり出している。

もし庭がなかったら、家は丸裸で隣地と接することになり、家の中からの眺めも味気ないものになったはずだ。永田邸の庭は決して広くないが緑が豊か。ウッドデッキの一部をカットしてヤマボウシを植え、その奥の少し高い位置に水鉢を埋めて周りを植栽。植物が地盤面より上にあるので、室内からもよく見える

永田邸の庭を読み解く
3つのキーワード

庭の引っ越しが終ったあと、前の道を歩いている人が永田邸のアプローチを見て、
「ここ、前からこうだっけ?!」と驚いていたという。
ただの路地が見る見るうちに緑の小道に変貌し、しかも、スペースの割に緑の層が厚い。
なぜだろう？　この庭の秘密を解く鍵は3つのキーワードにあった。

写真提供／プランタゴ、アネックス

2 移植

土の中で春を待つ種も、小さな生物もそっくりそのまま移植

前の家には樹木も多かったが、根を傷めずに移植することが難しいので、ヤマボウシのみを移植、ほかの樹木は新たに植えた。木と木の間に草花のためのフトンカゴを配置してスタンバイ。秋のある日、造園学校の生徒を含むおよそ30人が参加し、田瀬さんの指揮のもとに庭の引っ越しが行われた。鉄の型枠、スコップ、クワなどを使って縦35㎝、横25㎝、厚さ5〜6㎝にカットされた表土はトレイに並べられた。切り出した表土は約300枚。ひなたの植物は黄色、半日陰の植物は青と、トレイにテープを貼って分類、新しい庭に植え替えるときの目安にした。引っ越しは1日で終了。前の家と新しい家が近かったことも草花には幸いし、ほとんど枯れずにすんだ。

1 旗竿地

旗竿地のデメリットを植物の力でメリットに変える

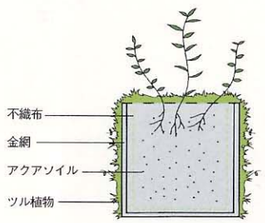
この敷地はもともと知り合いの工務店の所有で、4区画のうちの1つだった。借家を出るにあたって別の借家を探していた永田さんに、「先生、借家で貸すから、自分で設計して建ててよ」と、この土地が提供された。結果として永田さんが購入し、借家ではなく自邸となった。

旗竿地は敬遠されがちだが、区画割の都合で旗竿地を選択せざるをえないケースは少なくない。竿の部分を緑化した永田邸のアプローチは、旗竿地の条件を逆手に取って魅力的な住環境をつくる試みでもあった。竿の部分は幅2.5m、長さ15m。真ん中あたりに土を盛って少しだけ高くし、アプローチを太鼓橋のようにすることで、さらに長く感じさせている。

What's 5×緑?

5×緑の仕組み

金網のカゴの内側にヤシの繊維のマット、不織布、ネットなどを張り、人工土壌アクアソイルを入れる。アクアソイルは石を焼いて発泡させたもので、普通の土の半分の重さ。保水力があるので水やりが少なくてすみ、時間がたっても物性が変わらないから、入れ換えずに使える。側面にテイカカズラなど、ツル性の植物を植えると、緑のキューブになる。



里山ユニットの種類

5×緑はサイズも大きさも自由自在、スペースに合わせて注文できるが、置くだけで簡単に緑が楽しめる里山ユニットも製品化されている。小さいながらも里山の風景を映すことを基本に、在来の植物10〜25種類を組み合わせてつくられている。植生を乱さないように、現在の供給エリアは関東6県と福島県、長野県まで。(他のエリアは、地域の植生に対応可能な場合に限り供給。要相談)

里山ユニット20㎝キューブ
¥18,900(税込)
サイズ：200×200×200㎜
植物を入れた高さ：H700㎜
重さ：約6kg
植物の種類：木本類4種、草本類5種
(植物の種類は目安となります)

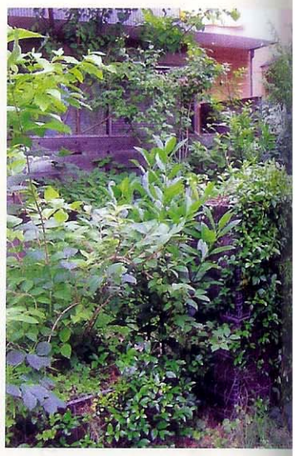
里山ユニットの施行例。置くだけで簡単にベランダガーデンができる

問アネックス　☎03・3280・2041
http://www.5baimidori.com/

3 5×緑

地面の高さを変え、側面も緑化。層の厚い緑はこの方法で

人工地盤に覆われた都会に緑を植えようとすれば、コンクリートの桝や鉢を使うことになる。ヘタをすると植物より桝や鉢を見て暮らすことになる。側面も緑にできないだろうか。そんな発想から生まれたのがこの方法。フトンカゴとは土木工事用の金網で、石を詰めて川の護岸工事に用いたり、擁壁に使われる。田瀬さんはこのカゴを利用して5面を緑化する方法を開発、5×緑と名付けた。永田邸ではアプローチに7か所、庭に2か所、5×緑を配置し、限られた敷地を立体的に緑化した。「小さな面積でもいろいろな種類の植物を楽しめること、工期が短く、比較的低コストでできることも魅力のひとつです」と田瀬さん。



建築家
永田昌民

「家を建てるということは、風景をつくること。周囲になじむ風景を植物がつくってくれる」

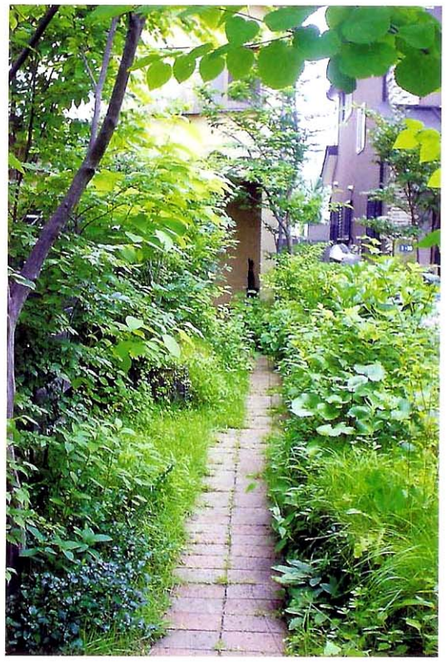
Profile
1941年大阪府生まれ。東京藝術大学美術学部建築科で吉村順三氏の指導を受ける。'76年、益子義弘とM&N設計室設立。'84年、N設計室に改称。「小さくても大きく住める」心地のよい住宅づくりには定評がある

庭を育てるのは住む人。建築家と造園家だけが頑張ってもうまくいかない

旗竿地に家を建てることになった永田昌民さんは、造園家の田瀬理夫さんに相談を持ちかけた。旗竿部分を有効に生かしたかったからだ。

そのとき田瀬さんは、永田さんに「車、置きますか?」と尋ねたという。普通は旗竿部分を駐車スペースに使うから、味も素っ気もないアプローチになってしまう。永田さんは敷地内に車を置くのをやめて、外に駐車場を借りることを選択した。

「それが決め手でしたね。車を置かなかったからアプローチガーデンができた。旗竿の竿の長さが宝になりました」と田瀬さん。



東久留米の家で長年植物と共存し、自然の営みに目を開かれた永田さんは、建主にも必ず「落葉樹を1本、植えませんか」と提案する。

「長く住んで、子供たちが大きくなっても残っている木。1本の木から始まる庭があると思います」

そんな永田さんと、里山の植物を使って環境デザインを手掛けてきた田瀬さん。相通じるものがありそうだが、別にコンビを組んで仕事をしてきたわけではない。共通の知人の縁結びで知り合った。

永田邸の庭づくりには、大きな課題があった。それは前の家の植物を移植すること。妻の佑子さんは子供の頃から里山に親しんだ植物好きで、庭を手塩にかけてきた。一生共に暮らすつもりで育てた植物と別れるのはつらい。田瀬さんは、そんな佑子さんの思いに応える術を知っていた。それは鉄製の型枠を使って庭の表土を野草ごと切り取り、移植する方法だった。「土ごとこちらに持ってこられることがわかってから、引っ越しに乗り気になりました」と佑子さん。

永田邸の庭づくりにあたって、田瀬さんはもうひとつ、「5×緑」(ゴバイミドリ)という独自の方法を用いている。これはフトンカゴと呼ばれる金網のカゴの中に人工土壌を入れ、底面を除く5面を緑化するというものだ。側面も植物で覆われるので、緑の表面積が圧倒的に広くなる。大きさや高さの違うフトンカゴを配置することで地面の高さが変わり、立体感が生まれる。

永田邸のアプローチと庭には、さまざまなフトンカゴが適所に配置されている。上面には前の庭から切り取った表土を置き、側面にはツル性のテイカカズラを植えた。引っ越しから丸4年が過ぎて、カゴの金網はほとんど植物で隠れてしまった。

永田邸のアプローチは季節ごとに姿を変えて、道行く人の目を楽しませている。建築家と造園家、そして植物と日々近しく付き合っている佑子さんの共同作業が、町の一隅にこんなにも豊かな風景をつくり出した。改めて環境に寄与する植物の力の大きさを感じずにはいられない。

田瀬さんは、最後にこんなアドバイスをしてくれた。

「いくら建築家が庭をつくりたがっても、建主がそう思っていなければうまくいきません。建築家に造園を頼まれたら、建主はそう思っているのですか?と確認します。建築家がこの庭がいいんだ、と押し付けると、心を癒すための庭がストレスのもとになってしまいますからね。庭は建主以上のものにはならないんです」

造園家
田瀬理夫

「家の中から外の世界がどう見えるか考える。大事なのは、住む人の目線になることです」

Profile
1949年生まれ。千葉大学で都市計画と造園史を学び、'73年、富士植木入社。'77年、(株)プランタゴ設立。小住宅から都市環境の再生、地域の再生まで、数多くの環境